

■ 実習

実習「タワー・ビルディング」

中村和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

津村俊充

(南山大学人文学部心理人間学科)

ねらいの例

- ・グループでともに活動する際に、お互いの間に起こっていること（グループプロセス）に気づく。
- ・グループで話し合い、タワーを作る過程で、お互いの間で起こること（例えば、自分自身のコミュニケーションの様子や関わり方、他のメンバーの様子、グループ全体の雰囲気や課題の進め方、ものごとの決め方、リーダーシップ、など）に気づき、その体験から学ぶ。

(上記のねらいは、学習者の状況に合わせて表現を変える必要あり)

グループサイズ

1グループ 4名～8名。グループ数はいくつでも可能。

所要時間

120分（小講義を含めれば150分、課題の実施やふりかえりを短くすれば100分）

準備物

1. 手順書（資料1） 各自に1枚
2. ふりかえり用紙（資料2） 各自に1枚
3. タワー製作用の材料 例：コクヨ シカ-10W 100枚入り 各グループに1パック
画用紙（白：八つ切り） 各グループに5枚

- A4の白紙 各グループに10枚
4. 厚模造紙（タワーの台紙用） 各グループに1枚
 5. 製作のための道具 ホチキス、セロテープ、のり、はさみ 各グループに1つずつ
 6. A3の白紙（裏紙） 各グループに数枚 ※話し合いの際のメモ用に使用

会場の設定

移動可能な机と椅子を使用することが望ましい。グルーピング後は、グループのメンバーが机をはさんでお互いに向かい合える状態になれるよう（グループ形式）に設定する。

場合によっては、タワーは机の上でなく、床の上に厚模造紙を敷き、その上に作成するようにした方が、安定感のある作品づくりになるだろう。

手順

1. 導入 日程表などを配布し、ねらいと実習の手順を説明する。
2. グルーピング 何らかの方法でグループ分けを行い、グループの場所をセッティングするように伝える。お互いに初めて会う場合は自己紹介の時間を設ける。
3. 課題の導入 手順書（資料1）を配布し、課題の内容を説明する。その際、以下の点について伝える。
 - ・話し合い（15分）の間は、タワーの製作はできないこと。
 - ・タワーは自立しており、天井や蛍光灯など、他の場所に貼りつけてぶら下げたり支えたりすることはできないこと。
 - ・プレゼンテーションでは、タワーの名前と特徴を他のグループメンバーに伝えるが、プレゼンテーションの内容や発表者は製作終了までに決めること。
 - ・タワーは、高さ・安定性・プレゼンから審査され、最優秀タワーが1つ決定されること。なお、決定の仕方（誰がどのように決めるか？）をあらかじめ伝えておくことが望ましい。
4. 材料の配布 タワー製作用の材料(コクヨ:シカ-10W・画用紙・A4の白紙)、製作のための道具（ホチキス・セロテープ・のり・はさみ）、メモ用A3の白紙、台紙用厚模造紙を各グループに配布する。

<手順1～4までで約15分>
5. 課題の実施 <45分>
 - 1) どんなタワーをどのようにタワーを作るかを話し合う <15分>

グループでどのようなタワーを作るか、それをどのように作るかを、グループのメンバーが話し合い、計画する時間である。話し合う際には、タワー製作用の材料に触れることはできるが、折ったり、切ったり、

組み立てることはできないことをファシリテーターは伝える。また、各グループに配布された白紙（A3数枚）を使って、どのようなタワーを作成するかを描くことができる。

15分経過したところで、ファシリテーターが合図をして、次の製作タイムに移る。なお、全体の時間が足りない場合は、話し合いの時間を10分間と設定することも可能である。

2) 製作タイム <30分>

製作タイムでは、タワー製作用の材料を用いて、模造紙の上にタワーを作る。その際、台紙となる厚模造紙にタワーをセロテープなどで貼りつけてよいこととする。

これまでの経験上、社会人がこの実習に取り組む場合、かなり大きなタワーができる。製作をする際に、大人が机の上に乗ることもあり、危険なため、タワーの土台となる模造紙は机の上ではなく、グループの近くの床に敷いた方がよい。

全体の時間が短い場合は、製作の時間を25分間に設定することも可能である。

6. プレゼンテーション グループごとに順にプレゼンテーション（各グループ2分ほど）を行う。他のグループのメンバーに、タワーが見えやすい場所に移動してもらい、その後、タワーを製作したグループの発表者が、タワーの名前と特徴（アピールポイント）についてプレゼンテーションをする。 <10分：グループ数により変動あり>
7. 審査結果の発表 「最優秀タワー」をどのように決めるかは慎重に検討する必要がある。方法としては、①ファシリテーターが決める、②第三者の審査者が決める、③各グループの自己採点、④メンバー全員による投票で決める（優秀なグループ2つを投票するなど）、⑤拍手の大きさで決める、などの選択肢が考えられる。筆者らの経験上、社会人対象の場合は⑤で実施することが多い。なお、以下に述べるように、“①ファシリテーターが決める”というのは、ファシリテーターと学習者の関係性に様々な影響を及ぼすため、避けた方がよい。 <数分>
8. ふりかえり用紙記入 <15分>
9. グループでのわかちあい <15～25分>
10. 全体でのわかちあい <5～10分>

ファシリテーションのポイント

1. この実習課題の特徴

この課題は、正解がない製作型実習であり、似ている実習課題としては創造的グループ活動として「オブジェ作り」（Creative Human Relations Ⅲ巻 pp.203～222）などが挙げられる。実習「タワー・ビルディング」は、限られ

た材料を用いて何を作るかという目標（完成状態）の共有が必要となるとともに、計画段階での設計によっては、タワーが高くなることや、タワーが製作途中で倒れることがある。そのため、実習「タワー・ビルディング」の方がより計画性が必要となり、実習「オブジェ作り」はより創造的で芸術的である。

この「タワー・ビルディング」は、目標の共有化、グループでの意思決定、作業手順の明確化や共有化、役割の分担と統合、リーダーシップなど、グループプロセスのいろいろな要素が起こりやすい課題である。そのため、これまで既にラボラトリー方式の実習体験がある学習者により適していると考えられる。たとえば、学習者が既にカード型の問題解決実習などを体験したことがあり、「コンテンツとプロセス」という視点を持っていて、さらにグループプロセスの諸要素を体験して学ぶことや、グループでの協働プロセスについて体験から学ぶことをねらいとする場合に、またグループプロセスに気づきグループやメンバーに意識的に働きかける行動（介入）を学ぼうとする場合などに、この実習を実施するのが適していると思われる。

2. タワー製作用材料について

筆者らは経験上、1グループの材料として、①固めのB6（12.8cm×18.2cm）のカード【コクヨ情報カード シカ-10W】100枚、②八つ切りの画用紙5枚、③A4の白紙10枚を渡している。しかし、①や②は厚めの紙であり、エコの観点からすると資源の無駄遣いとも考えられる。資源の再利用をしながら、この実習を行う場合は、古新聞や印刷ミス裏紙を一定の大きさにカットしたうえで、それらを材料として使うことも可能である。

3. 審査方法について

ファシリテーターにとって、製作型の実習を実施する際に、審査を実施するのかどうか（「審査あり」か「審査なし」か）を決める必要がある。この手順は「審査あり」で設計されている。「審査あり」とすることによって、グループのメンバーはより高く、より安定することへの動機づけが高まりやすい一方、最終結果として優劣が付けられた場合にそれに対して不満を感じることもある。そのため、ファシリテーターが「最優秀タワー」を審査するのは避けた方がよい。ただし、コンテンツ（結果：成果）とプロセス（過程：関係）の両面から学ぶことを意図した教育プログラムにおいては、第三者による評価を行ってもらい、評価基準なども明確に示し、審査結果を明示することも大切になるだろう。

なお、「審査なし」でこの実習を実施する場合は、手順書の「課題」の部分の、「タワーは、高さ・安定性・プレゼンから審査され、最優秀タワーが1つ決定されます」という表現を削除する必要がある。

4. ふりかえり用紙について

今回添付されているふりかえり用紙は、すでにラボラトリー方式の体験学習を体験したことがある大学生や社会人向けに、手順書に書いてあるねらいと対応させて作成したものである。ふりかえり用紙は、設定されたねらいに対応させながら、学習者の状況に合わせて作成する必要がある（どのようなふりかえり用紙の項目を用いるかを考えること自体が重要なファシリテーションのポイントであろう）。そのため、今回添付されているふりかえり用紙は実習「タワー・ビルディング」用のものというよりは、製作型実習で用いるふりかえり用紙の1つのサンプルとして考えていただきたい。

5. 小中学校で実施する場合

小学校で実施する場合は、製作タイム前の話し合いを15分行うのは難しく、児童達はすぐにタワーを作りたくなると思われる。45分間の授業で実施する場合に、話し合いと製作タイムを分けずに、①導入（5分）、②話し合いながらの製作（25分）、③プレゼンテーション（5分）、④ふりかえり用紙記入とわかちあい（15分）、⑤全体のわかちあいとコメント（5分）という時間配分とすることも可能であろう。その際にねらいとして、「伝え、聴くこと」というコミュニケーションのねらいを挙げることや、「お互いに協力して1つのことをするために大切なことに気づく」というグループでの協働を考えるねらいを取り上げることができる。

中学校での50分授業で実施する場合、話し合いと製作タイムで少なくとも35分は必要であり、授業1コマ分ではふりかえりに充分時間を割くことができなくなる。2コマ連続で実施できる場合は、一案として以下のような時間設定が考えられる。1コマ目（50分間）で、①導入（5分）、②グルーピング（5分：グルーピングが必要ない場合には、話し合いと制作に時間をとるとよい）、③どのようなタワーを作るか話し合う（10分）、④製作タイム（30分）、2コマ目（50分間）で、⑤プレゼンテーション（10分）、⑥ふりかえり用紙記入とわかちあい（25分）、および、⑦全体でのわかちあいとコメント（15分）を実施する、という流れも考えられる。このプログラムは、1コマ目で十分に活動をし、2コマ目でふりかえりをしっかりするという流れである。

また、1コマ目に一度話し合いを行い、その話し合いの体験をふりかえり、2コマ目での製作タイムに活かしていくという、体験学習のサイクルを二順するイメージでプログラムを構成することもできる。たとえば、以下のような時間設定が考えられる。1コマ目（50分間）で、①導入（5分）、②グルーピング（5分）、③どのようなタワーを作るか話し合うまで実施する（15分）、④ふりかえり用紙記入とわかちあい（20分）を実施し、2コマ目（50分間）で、⑤製作タイム（20分）、⑥プレゼンテーション（10分）、⑦ふりかえり用紙記入とわかちあい、および、全体でのわかちあい（20分）を実施する、という流れである。

原案の作成

この実習は、2005年7月に中村がNTL Institute主催“Human Interaction Laboratory”に参加した際に実施された実習“Tower Building”での体験を基にして、中村と津村が作成したものである。“Tower Building”はNTLメンバーが伝統的に使ってきた実習である。タワーをグループで製作すること、話し合いと製作の段階を分けること、約15cm×21cmの厚紙1パックを用いることは、NTLで実施された実習からヒントを得た。タワーを製作する基準（高さ、安定性、プレゼン）を設けたこと、タワーを製作する材料、実習の手順（プレゼンテーションやふりかえり）、実習のための手順書やふりかえり用紙、などは我々が考案した点である。

資料1

実習「タワー・ビルディング」

ねらい：・グループで話し合い、タワーを作る過程で、お互いの間で起こること（例えば、自分自身のコミュニケーションの様子や関わり方、他のメンバーの様子、グループ全体の雰囲気や課題の進め方、ものごとの決め方、リーダーシップ、など）に気づき、その体験から学ぶ。

課題：

グループの課題は、与えられた素材を用いて、タワーを作ることです。タワーは、できるだけ高く、できるだけ安定したものを製作してください。なお、作品は自立している必要があります。

プレゼンテーションでは、各グループの発表時間は2分間です。プレゼン際には、タワーの名前と特徴（アピールポイント）を伝えてください。タワーは、高さ・安定性・プレゼンから審査され、最優秀タワーが1つ決定されます。

手順：

1. 導入・課題の説明 (10分)
2. どのようにタワーを作るかを話し合う (15分)
3. 製作タイム (30分)
4. プレゼンテーション (10分)
5. ふりかえり用紙記入 (15分)
6. グループでのわかちあい (25分)
7. 気づきや学びの全体でのわかちあい (10分)

出典：中村和彦・津村俊充（2009）実習「タワー・ビルディング」
南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」第9号より

資料2

実習「タワー・ビルディング」 ふりかえり用紙

1. この実習の中で、あなたは……

どれくらい参加した実感がもてましたか？
(どのような点で)

1	2	3	4	5	6	7
└───┬───┬───┬───┬───┬───┬───┘						
全くできなかった			充分できた			

2. 課題に取り組んでいる間のグループ全体のプロセス（例えば、コミュニケーションの様子、リーダーシップや影響関係、目標の共有化、グループの規範＝決まりごと、意思決定のされ方、進め方や手順化、全体の雰囲気やその変化、など）について、気づいたことを記入してください。

<話し合い段階>

<製作段階>

3. グループのメンバー（あなたも含めて）について、参加や関わりの様子、印象的な動きや働きかけなど、そして、それらがグループ全体やあなたへ与えた影響、を記入してみてください。

<誰の>

<どのような言動が どのような影響を>

自分 :

_____ :

_____ :

_____ :

_____ :

_____ :

4. その他、気づいたこと・感じたこと・学んだことは？

実習使用規定

ラボラトリー方式の体験学習に関するツールを公開することで、ラボラトリー方式の体験学習が広く普及することを願って、第7号(2008)より「実習」を掲載しております。ここに掲載されている実習は、当センター研究員とその仲間によって開発され、これまでの教育実践で用いられてきたものです。使用の際には以下の留意事項をお守りください。

なお、ラボラトリー方式の体験学習を実施する際には、まずはご自身がラボラトリー方式の体験学習を体験されることをお勧めします。当センターではラボラトリー方式の体験学習を用いた公開講座を開催しております（詳しくは当センターの Web ページ <http://www.nanzan-u.ac.jp/NINKAN/> をご参照ください）。体験学習のファシリテーションを学んだ上でご使用ください。

実習を使用する際の留意事項

1. 著作権は著者に属します。実習を販売することや、営利目的の発行物などに転載することは禁止します。なお、教育目的での無料の発行物などに転載を希望される場合は、当センター事務局にお問い合わせください。
2. ラボラトリー方式の体験学習として教育・研修などに使用される場合には、各実習の課題シート（実習の指示書）に出典を明記してください。使用の際に当センターや著者に許可を得る必要はありません。また、使用料も発生しません。

【出典の記入例】

出典：大塚弥生（2008）「グループ エントランス」

南山大学人間関係研究センター 人間関係研究, 第 7 号より

3. 課題シート（実習の指示書）をそのまま使用するのではなく、プログラムの実施状況に合わせて適宜修正・変更した上で使用する場合は、「参考」として出典を明記してください。
4. ラボラトリー方式の体験学習で大切にされている教育観（学習者中心の教育、非操作の教育、学習者が自らの人間的成長に取り組む教育）に反する使用は禁止します。たとえば、営利目的で学習者を操作する自己啓発セミナーなどでの使用は一切禁じます。